

◆西隆寺旧境内・右京一条二坊の調査 —第306次・第309次

1. はじめに

この調査は奈良市都市計画道路建設にともない、奈良市西大寺東町において実施したものである。

調査地は平城京右京一条二坊十五坪にあたり、奈良時代後半には西隆寺が造営された場所である。調査は金堂の南から、中門、南門にかけての地を2次に分けて行なった。第306次調査は、金堂から中門にかけての650m²、第309次調査は、中門から南門にかけての406m²を対象に実施し、総面積は1056m²である(図52)。

調査の結果、西隆寺関係では金堂正面の灯籠遺構を見出し、寺廃絶後に営まれた井戸や掘立柱建物などを検出した。下層からは、西二坊坊間西小路とその両側溝、井戸などの西隆寺創建以前の宅地関係の遺構、そして斜行溝などの平城京以前の遺構も検出した。出土遺物には石製六角塔など興味深いものがある。



図52 調査区位置図 1:4000

2. 第306次調査

調査概況

第306次調査は西隆寺寺域のうち、金堂基壇の一部および金堂と中門の中間地を発掘した。調査区は南区、中区、北区と設定したが(全体で650m²)、北区・中区で第3次調査と約85m²重複している。調査期間は1999年7月1日から9月30日であった。

基本層序は、上から近現代の盛土、黒灰粘土(旧耕土)、灰白砂質土(床土)、黄灰・褐色砂質土(遺物包含層)となり、その下の褐灰砂質土(整地土)上面および灰青茶細砂・灰褐白粗砂(地山)上面で、平城京や西隆寺期の遺構を検出した。遺構面の標高は71.5~71.65m。遺構面は北東から南西にゆるやかに下る。

遺構は、おもに平城京以前の斜行溝状遺構10条、平城京期の西二坊坊間西小路と東西両側溝、東西溝5条、井戸1基、西隆寺期の灯籠据付穴と東西瓦敷、西隆寺廃絶後の瓦土坑などを検出した(図53)。金堂基壇は削平されてまったく残っていなかった。他に建物などの遺構としてはまとまらない小穴・小土坑も多数検出した。なお今回、中近世以降の耕作溝は図示、解説を省略した。

検出遺構

平城京前の遺構

SD741~SD749・SD754 国土方眼の約45度方向にはしる斜行溝群。中区・南区の地山(灰青茶細砂・灰褐白粗砂)上面で、北東から南西および北西から南東へ下る溝をそれぞれ5条ずつ検出した。前者と後者はほぼ直行する。幅は25~35cm、深さ5~15cmで、SD741のみ幅が約1mとなる。SF105上でも検出したが、SD095やSD110には切られることから、奈良時代前の遺構と考えられる。埋土は黒茶粘砂で遺物は全く含まないため、水田耕作にともなう溝もしくは水田の区画を示す畦と推測する。ちなみに溝心距離は2.0~2.5mである。

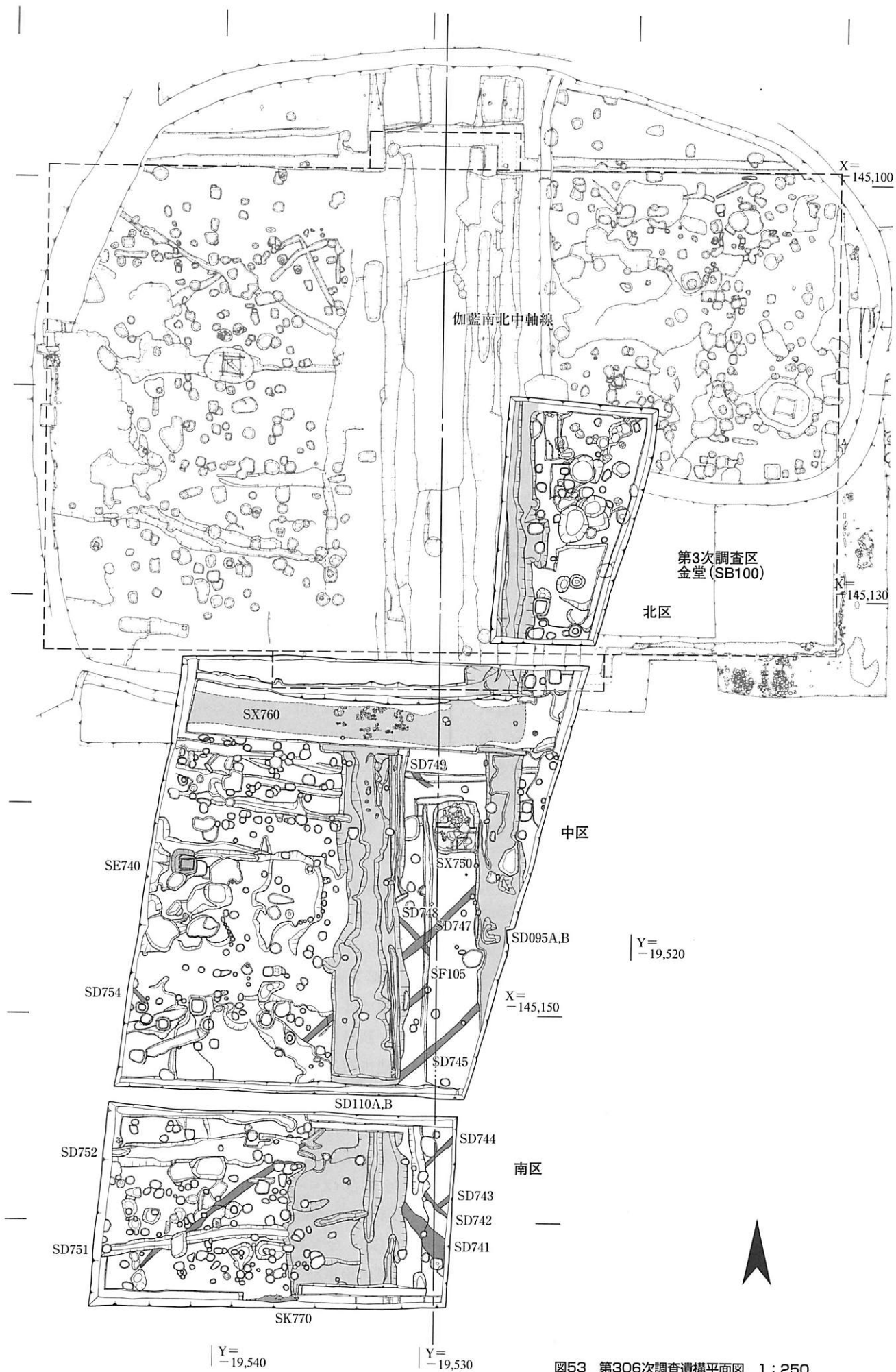


図53 第306次調査遺構平面図 1 : 250

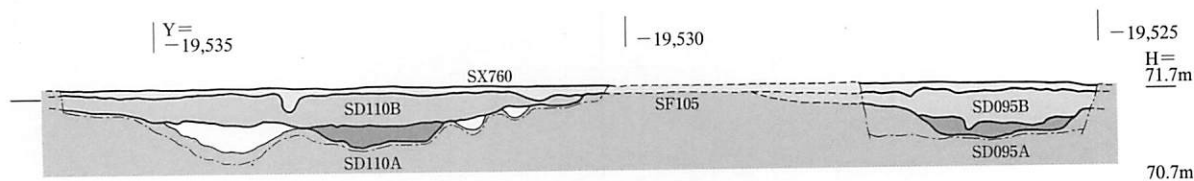


図54 SD095・SD110・SF105・SX760 断面図 (X=-145,127.0) 1:80

平城京(西隆寺建立前)の遺構

SD095A,B 西二坊坊間西小路東側溝(図54)。第3次調査の重複部分を含む南北約28m分で検出した。第3次同様、2時期に分かれたが、SD095A,Bとも素掘り溝で南に流れる。下層のSD095Aは幅が約1.6m、深さが10~20cmで、埋土は茶色系粘土と灰白砂質土がシルト状に混ざる。上層のSD095Bは幅約2.3m、深さ10~35cm、埋土は黄灰~暗灰色の砂質土で広めに改修されていた。

SD110A,B 西二坊坊間西小路西側溝。SD110A,BもSD095同様、南に下る素掘り溝で、南北約27m分検出した。下層のSD110Aは幅1.6~2.0m、深さ15~25cm、埋土は暗青灰色粘質土と灰色砂がシルト状に混ざる。溝底上面で土器片が多く出土した。上層のSD110Bは幅3~4m、深さ10~35cm、埋土は黄灰色系の砂質土。西に広く改作されていたが、特に南区では西の東西溝SD751・SD752が流れ込み、幅約6.5mと東西に広くあふれた様子が観察できた。

SF105 右京一条二坊内の西二坊坊間西小路。第3次調査検出の南延長部で南北約27m分検出した。路面は灰橙粗砂・黄灰粘砂の地山上面で、路面幅は3.2~3.5m。道路心はX=-145,127.0でおよそY=-19,529.3だが、伽藍南北中軸線のふれN0°19'50"W(「北で西に0°19'50"ふれる」：奈良国立文化財研究所学報第五十二冊『西隆寺発掘調査報告書』1993、以下『報告書』と略す)に沿う。下層のSD095AとSD110Aの心々距離はおよそ6.55m(1尺

=0.295mで22尺)で第3次調査とほぼ同じだった。

SE740 中区中央西端の地山(灰色粗砂)上面で検出した井戸。掘形は上部が約2.5m四方の摺鉢状、下部が約2m四方で、東西約1.2m×南北約1.4m、深さ約2mの縦板の井戸枠を用いている。底には拳大の礫が敷き詰めてあった。仕様は、まず四隅に幅細の縦板を斜め45度に刺し、次に東西に縦約1.8m、横80~120cm、厚さ3~4cmの一枚板をはめて安定させる。続いて南北に縦約1.5m、横20~30cm、厚さ3~4cmの板材を数枚ずつはめていき、最後に幅4~5cmの横材で押さえたとみられる。東西の枠板は一部にほぞ穴があり、厚さからすると床板などの転用材かもしれない。埋土は遺物を多く含む灰色~暗灰色の粘砂である。遺物では、枠内南東隅の最上層埋土(暗灰色粘砂)で、小型海獣葡萄鏡が出土した。これはおそらく井戸を埋める際の儀式で用いられたものであろう。

西隆寺期の遺構

SX750 金堂正面のSF105路面上で検出した灯籠の据付穴。東西約2.2m、南北約2.5mの隅丸方形で、深さは中央部分で約55cmを測る(図56)。灯籠の基壇は抜かれていたが、基壇の下に敷く根石を検出した。路面を浅い摺鉢状に掘り下げ、裏込土(遺物を多く含む暗茶灰砂質粘土)を敷き拳大状の石を据え、上にはほぼ上端を揃えて直径35~50cmの大型の根石を4石据える。根石は大体花崗岩だが、南東の1石は竜山石切石を斜め45度に割り、割面を上にして据えられていた。この割石は金堂基壇にともなう石材の可能性もある。また南半部の断割で、根石下の地山(暗茶灰粘土)直上に小石の抜取痕跡がみつかり、断面観察では、暗茶灰砂質粘土の下に遺物を少量含む暗灰粘土が観察できた。以上のことから、今回検出した根石は創建当初とは考えにくく、少なくとも1回は据付穴の位置をほとんど動かさずに、根石を取り替えて基壇を据え直した可能性が高いと推測する。

またSX750の心はおよそX=-145,130.85、Y=-19,528.57で、金堂心(X=-145,110.80、Y=-19,529.05：『報告書』)との距離は20.06m(1尺=0.296mとすると67.8尺)となる。

SX760 金堂基壇正面の瓦敷(図55)。第3次調査でも金堂基壇南東部で一部確認したが、今回は第3次の畦で残存した部分にあたり、周囲の遺構面より20cmほど高い面(標高約71.8m)で検出した。幅1.4~1.9m、西で北にふれながら東西に約16mのびる。SF105やSD095、SD110の



図55 SX760(西から)

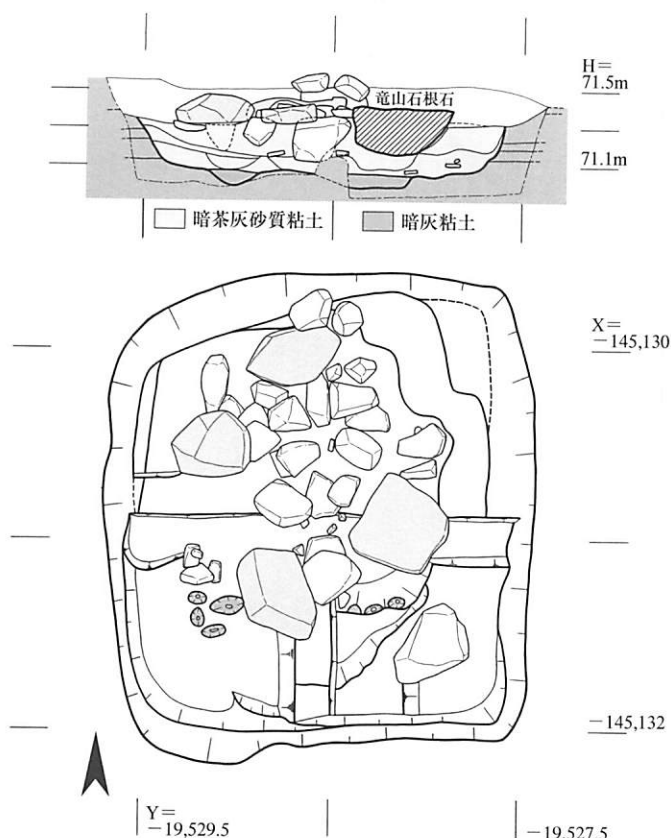


図56 SX750平面図(下)・断面図(上: X=-145,130.9) 1:40
直上に灰白～橙褐シルトをベースとして小礫(東半で直径4～5cm、西半で直径2～3cm)を敷き、その上に10～15cm角四方の使用済みの割瓦を、凸面を上にして敷き詰める。敷いた瓦に一部含まれていた軒瓦は西隆寺創建時の6235C、6775Aなどであった。また瓦敷の北辺は金堂南面階段の南辺推定部にあたることから、金堂基壇が存続する時期に敷いた舗装面と考えられる。

西隆寺廃絶後の遺構

SK770 西隆寺廃絶後に瓦を廃棄した土坑群の一つ。南区南壁にかかる幅3m以上の大土坑で、調査区外南に続く。金堂南にあたる中区・南区の遺物包含層の灰褐砂質土上面で検出した。土器片はあまり含まれず、多量の瓦壊類が投げ込まれていた。

考察

ここでは、SX750について考察する。SX750の心と金堂心のふれはN 1° 22' 17" Wで、伽藍南北中軸線のふれN 0° 19' 50" Wよりも大きい。すなわちSX750が中軸線よりも約36cm(1.2尺)東にあることがわかった。このずれが施工誤差か他の理由かは现阶段では推定できなかった。また、金堂との距離67.8尺に対し、中門との距離は約89尺で、両者の関係性も見いだせなかった。

古代の灯籠遺構は、山田寺、奥山久米寺、興福寺などでみつかっている。SX750と西隆寺伽藍に関する上述の問題点については、他の遺構例と比較検討した上、本報告で詳論したい。

(運沼麻衣子)

3. 第309次調査

調査概況

調査は調査区を東西2区に分けておこない、東側を東区、西側を西区と呼ぶ。なお調査期間は1999年10月20日～12月28日である。

調査区の基本的な土層は東区、西区とも、上から、現代の盛土、水田耕土、床土、茶褐土、暗茶褐土(遺物包含層)とつづく。その下は遺跡のベースをなす土層で、東区は茶褐色粘土層、西区は黄色粘土層または灰色粗砂層であり、主要な遺構はこれらの土層の上面で検出した。遺構検出面は現地地表下約1.4mで、標高71.2m前後である。

検出遺構

検出遺構は平城京造営以前の遺構、西隆寺建立前の平城京の遺構、西隆寺廃絶後の遺構とに分かれる。東区北端は中門の、南端は南門のそれぞれ推定位置にあたるが、いずれも後世の削平により、基壇はもとより、基壇の掘込地業、雨落溝など、建物の位置や規模を直接示す遺構は残っていなかった。したがって、西隆寺に関する遺構は寺の廃絶以後に限られる。

平城京前の遺構

SD800・801 東区南端で検出した斜行溝。幅約0.3m、深さ0.1～0.2m。溝の方向は国土方眼に対して北で西に約50度振れる。埋土は堅くしまった暗褐色粘質土で、ごく少量の土器細片を含む。

SD810・811 西区で検出した2本の斜行溝。SD811は、幅0.4m、深さ0.2mで、国土方眼に対して北で西に約40度振れる。SD810は幅0.2～0.4m、深さ0.2m、国土方眼に対して北で東に約40度振れる。両溝の堆積土は暗褐色砂質土で、SD810には須恵器小片を含む。

SD812・813 西区の東西溝。SD812は、幅0.4m、深さ5cm。埋土はこげ茶色砂質土で、土師器小片を含む。SD813は幅0.35m、深さ16cm、溝の方位は方眼東に対して南に約10度振れる。埋土は暗褐色砂質土。

以上の溝は、水田に関係する遺構の可能性はある。

平城京(西隆寺建立前)の遺構

SF105 西二坊坊間西小路。東区で南北35m分を確認した。道路幅員に関しては、東区南端で得た、東側溝SD095西肩から西側溝SD110下層東肩までの距離(幅員)約4.2mという数値がある。この場合の道路心の座標位置

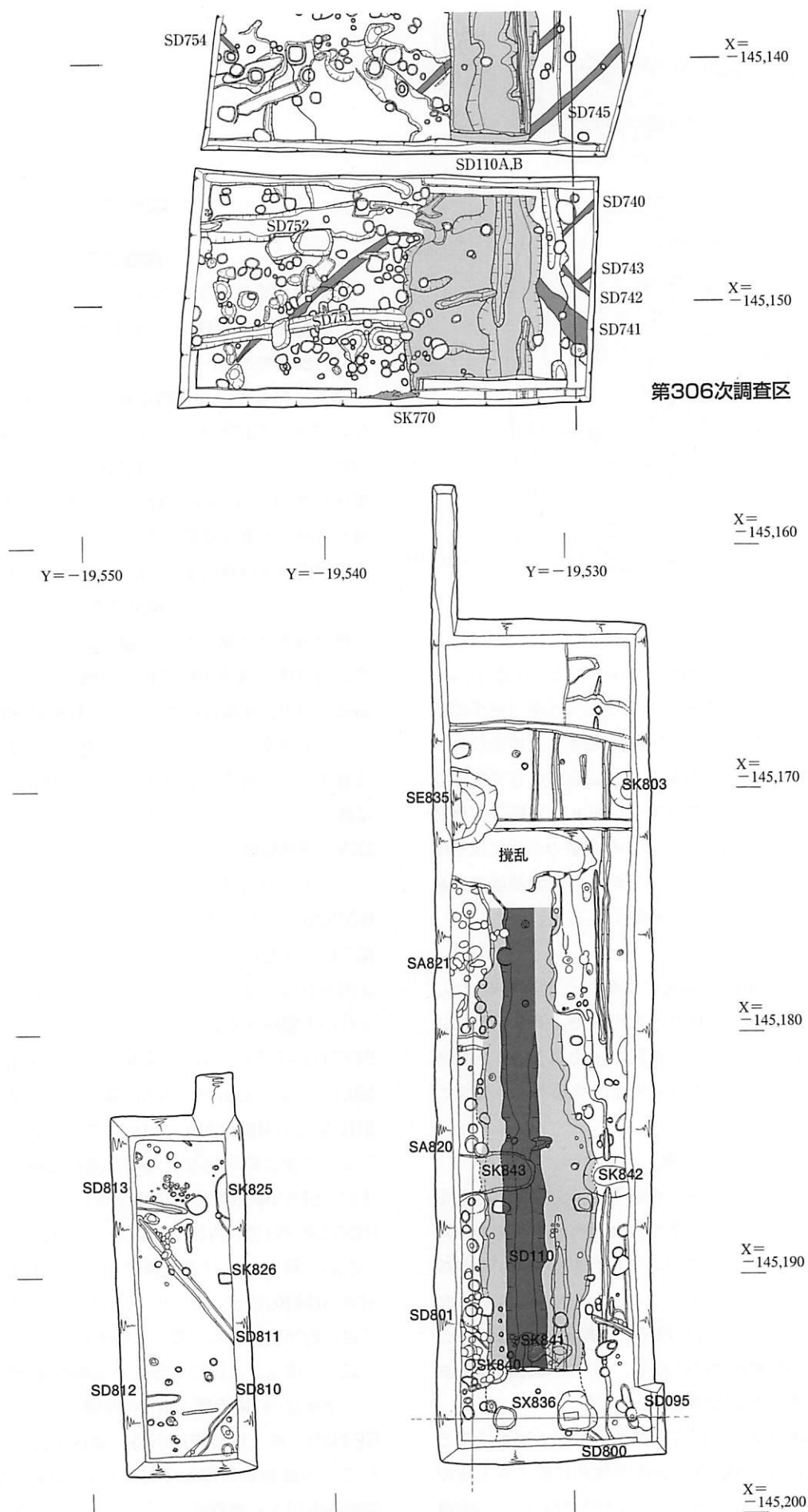


図57 第309次調査遺構平面図 1 : 250

は、Y = -19,529.0となる。ただし、今回検出したSD095西肩が、掘削当初の位置をとどめているかは不明であり、参考にとどまる。路面舗装の痕跡はない。

SD095 SF105の東側溝。東区南端で、南北溝西肩のごく一部を検出した。

SD110 SF105の西側溝。上下2層に大別される。下層溝（SD110A）は、幅約1.5m、深さは0.5m前後。ほぼ側溝本来の規模を示すものであろう。灰色砂層が堆積する。上層溝SD110Bの埋土は褐色ないし暗褐色砂質土である。SD110Aは、方眼方位に対して北でやや西に振れる。

SA820・821 掘立柱南北塀。SA820はSD105の西肩から約1.5mの位置にあり、東区の南端から北へ8間分を確認。柱間は、1.5～2.4mと一定しない。SA821は、その北の南北塀。3間分確認。柱間は南から2.0、2.7m。ともにその位置からみて十五坪の東端を画する塀であろう。

SK825 西区北部で検出した土坑。南北2.6m、東西0.4m、さらに調査区の東外にひろがる。深さは0.5mまで確認したが、崩壊の危険のため、底の確認を断念した。埋土は暗褐色砂質土で炭化物と多量の土器が出土した。

SK826 SK825の南にある小土坑。南北0.5m、東西0.6m、深さ0.1mあり、ごく少量の土器が出土した。SK825・826は十五坪内の塵芥処理用の土坑であろう。

西隆寺廃絶後の遺構

SK840～843 東区南半部で検出した瓦を廃棄した土坑群。多量の瓦片が投棄されていた。位置からみて南門または南面築地所用の瓦を廃棄したものであろう。

SE835 東区北部で検出した井戸。掘形は一辺約3.2mの不整形、深さ約1.7mある。抜取穴出土の井戸枠残材から、縦板組の構造であることがわかる。抜取穴からはほかに土器、瓦、曲物などが出土した。

SX836 東区南端の2箇所の大型の掘立柱穴。東側の柱穴は一辺約1.6mの不整な方形を呈す。深さは0.7mあり、底に木製礎板をおく。西側の柱穴は掘形一辺が約0.9mの不整形を呈し、深さ0.6m。両柱穴の間隔（心々）は約2.7m（9尺）である。東側柱穴の柱抜取穴からは凝灰岩切片や、玉石が投棄された状態で見つかり、位置からみて南門基壇外装材であった可能性が高い。東側柱穴の東約2.5mに柱筋をそろえる柱穴があり、SX836を2柱からなる門状の施設と考え、柱穴はそれに取り付く塀と推定しておく。

出土遺物

出土遺物には、瓦廃棄土坑出土の大量の瓦罍類、西二坊坊間西小路西側溝SD110出土の多量の土器類に加えて、石製六角小塔など注目すべきものがある。

瓦罍類 第306次調査、第309次調査ともに大量の瓦が出土した。大半が瓦廃棄土坑からの出土である。軒瓦は西隆寺創建時の軒瓦編年第Ⅳ期に属する軒丸瓦6235C、軒平瓦6761Aが最も多い。

第306次調査では、第309次調査と対比すると、軒丸瓦6236Fや、軒平瓦6764Aも目立つ。軒瓦編年第Ⅴ期の6133N、あるいは平安時代までくだるかとおもわれる6125Aなども少量出土している。平瓦に「理」「目」「大」などの刻印をもつものがある。

西隆寺創建以前の瓦として、6284Ea、6314B、6664C、6719AなどがSD110ほかから少量出土している。

表9 第306・309次調査 出土瓦罍集計表

軒 丸 瓦			軒 平 瓦		
型 式	種	点 数	型 式	種	点 数
6012	Ab	1	6641	C	1
6125	A	2	6647	B	1
6133	N	1	6663	Cb	2
6225	C	1	6664	C	1
	E	1		I	1
	?	1	6668	A	5
6235	C	18	6681	A	1
	I	6	6691	A	2
	?	8	6710	A	1
6236	F	9	6719	A	1
	?	1	6721	C	1
6273	B	1		E	1
6282	?	1		?	2
6284	Ea	1	6739	A	2
6314	B	1	6761	A	28
6348	A	1	6764	A	14
型式不明		41	6775	A	8
			型式不明		22
軒丸瓦計		95	軒平瓦計		93
丸 瓦		平 瓦	埴		凝灰岩
重 量	1,071.7kg	3,596.0kg	13.2kg	104.9kg	鬼瓦
点 数	9,474	32,819	28	50	面戸瓦
					熨斗瓦
					隅切平瓦
					刻印平瓦「理」「目」「大」「丁」

土器類 第306次調査・第309次調査合わせて整理箱116杯の土器が出土した。特に西二坊坊間西小路SD110の土器は、奈良時代中頃の良い資料であり、須恵器に多彩な壺類がめだつ。土器類にはほかに、墨書土器、刻書土器、土馬、土鍾、獣脚硯、中世の青磁などがある。

（千田剛道）

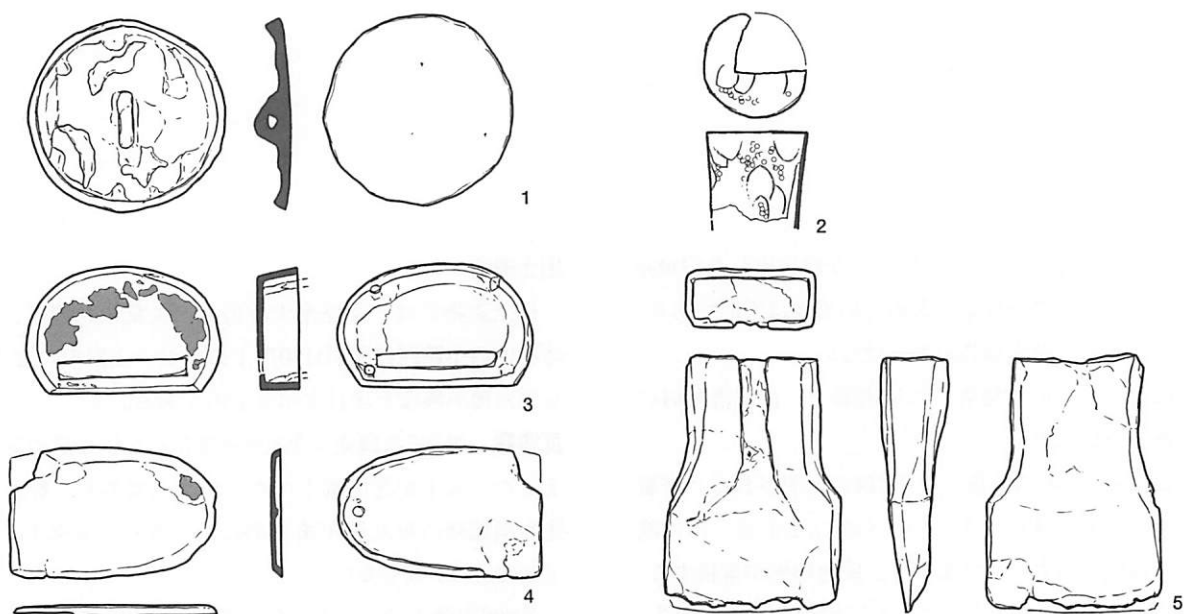


図58 第306・309次調査出土金属製品 2:3

金属製品・銭貨 遺物包含層および遺構内から、多量の金属製品が出土している。銅製品に経軸頭金具、海獣葡萄鏡、銚帯金具などがあり、鉄製品には、鉄斧、多量の釘などがある(図58)。

海獣葡萄鏡は、小型海獣葡萄鏡の内区のみを独立させたもので、径3.7~3.8cm。わずかに楕円になる(1)。鈕の周囲に四禽獣を配し葡萄唐草がそれを取り巻くが、文様は不鮮明である。井戸SE740の最上層から単独で出土した。このような内区のみ海獣葡萄鏡は、平城京右京二条三坊三坪、藤原宮西方官衙南地区、坂田寺東面回廊東側溝、橿原市四条大田中遺跡、石川県寺家遺跡などからの出土が知られている。

経軸金具は頂部径19mmの円筒形で、現存高20mm。厚さ1mmの銅板に鍍金をおこなったものである(2)。頂部上面および側面には、線彫りにより花文を表現した後に魚々子をその周囲と中房部分に打つ。魚々子は、径1mm弱で正円ではなく半円になるものが多く、重複も目立ち不揃いである。遺物包含層出土。金銅製の経軸頭の出土例には、平城宮内裏東方東大溝SD2700出土の頂部片、法隆寺東院地域出土の木彫如意輪観音坐像容器に転用されていたものなどがある。

銚帯金具は、丸軋表金具(3)および蛇尾表金具(4)がある。いずれも表面にわずかではあるが漆が遺存する。3、4ともに西二坊坊間西小路西側溝SD110出土。

鉄斧は、有袋斧でわずかに肩をつくる(5)。長さ4.9cm、刃部幅3.5cm。袋部の横断面形は方形を呈し、左右の折り返しは、合わせ目が「ハ」字状に開く。

銭貨は、和同開珎1点がある。

石製品・その他 石製品では、特殊なものとして、六角小塔の屋蓋および基座がある(図59)。いずれも遺物包含

層からの出土であるが、それぞれに近接した範囲から出土し、屋蓋は2点の破片が接合関係にある。

屋蓋(1)は、1辺が約6.1cmの六角形で、1/2を欠失する。石材は花崗岩で雲母片を多量に含む。上面には降棟を、下面には4段に垂木先を表現する。降棟先端の内側には、径1.2mm、深さ約4.5mmの小孔がそれぞれ一孔ずつ穿たれている。破断面で観察するかぎり孔径は一定で、中心に向かってわずかに傾斜する。おそらく風鐸あるいは環珞状のものが装着されていたのであろう。

基座(2)は、平面が1辺7.9cmの正六角形、厚さ1.9cmの板石で、約1/2を欠失する。石材全体の風化が著しいため判別が困難であるが、花崗岩系統の石材を用いている可能性がある。上下の面で状態が著しく異なり、丁寧に研磨されている面を上面、研磨が認められず荒い状態の面を下面とする。側面は上面と同様である。下面には一定方向の線条痕がみられる。中心からわずかにずれた位置に径5mmほどの貫通孔がある。後述する正倉院三彩塔の基座を参考にすると、心柱を支えるための孔であろう。

このような六角小塔の遺品には、石製品に正倉院南倉白石塔残欠、陶製品に同三彩塔(磁塔)、平城宮馬寮東方地区出土黄釉屋蓋がある。白石塔残欠は、基壇と最上層の屋蓋を残すのみで他は失われているが、三彩塔の第7層屋蓋および基壇と同形同大であることが指摘されている。正倉院三彩塔の基座は、1辺7.7cm、長径15.3cm、短径13.4cm、厚さ1.7cmとされ(植崎彰一「三彩塔」『国華』982号 1975)、西隆寺出土の石製基座とほぼ同形同大であることが注意される。

この他に、砥石が11点出土している。また、鉾澤、鞆の羽口など、鋳造あるいは鍛冶に関連する遺物が多量に出土している。

(次山 淳)

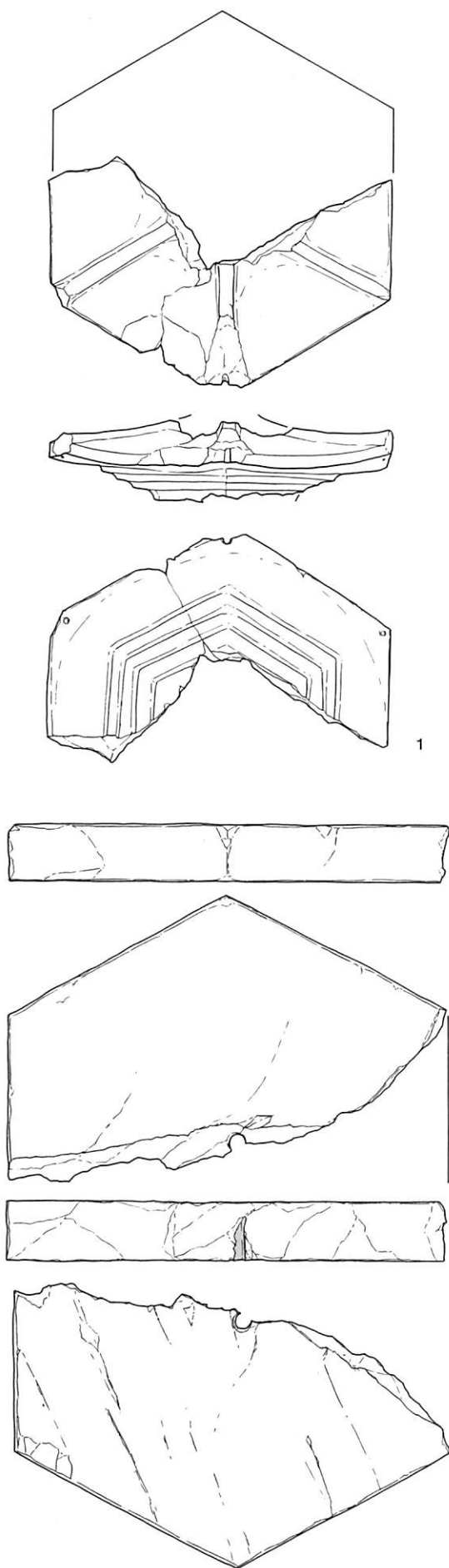


図59 第306次調査出土石製六角小塔 1:2

まとめ

第306次調査の成果としては、まず西二坊坊間西小路と東西両側溝を検出したことが挙げられよう。第3次調査成果と総合して、側溝心心距離が22尺で、道路心がおおよそN 0° 19' 50" Wふれることを確認した。

しかし特記すべきは、西隆寺期の灯籠据付穴SX750と瓦敷SX760を検出したことである。SX750は、元禄11年(1698)の『西大寺絵図』にある西隆寺の中で、弥陀金堂と楼門の間に描かれた灯籠が実在したことを裏付けた。これは考察で述べたように、西隆寺伽藍復原においても重要なデータを提供したと言えよう。一方SX760は、第3次調査で金堂基壇南東隅に一部見つけていた舗装面が、基壇土の残存する時期に金堂正面全体に広がることを暗示する遺構で意義深い。

遺物では、SE740から出土した小型海獣葡萄鏡、中近世の耕作溝を検出した遺物包含層から出土した石製六角小塔の屋蓋と台座、および経軸頭金具などが注目できる。石製六角小塔や経軸頭金具は、おそらく西隆寺廃絶後に、使用後の小遺物を整地土に混ぜて廃棄したものであろう。

第309次調査の結果、中門、南門の遺構については、後世の著しい削平により、直接的に建物位置をしめす痕跡は失われていたことが判明した。ただ、瓦廃棄土坑の存在、基壇外装材の残片の出土などにより、それぞれの想定位置に中門、南門が存在したことは明らかである。

大規模な瓦廃棄土坑SK842・843の位置が築地ラインより12mほど内側(北側)に入ったところにあることからみると、南門は、例えば興福寺南大門のように、築地を内側に屈折させた所にひらく形であった可能性もあろう。

つぎに特筆されるのは、寺の廃絶後、水田化までの間に限定できる遺構の存在である。寺の跡地に、井戸といくつかの掘立柱建物からなり、南面を堀と門で区画した一角を構成している。おそらく、寺廃絶後も一条条間路が存続していたことをも示唆しよう。

この遺構の性格を的確に指摘する材料は乏しい。しかし、中世に、この一帯は水田化し、西大寺の領有となっていることから、ひとつの可能性としては、さかのぼって西大寺との関わりを推測させるものがある。予定している本報告に際して検討を進めたい。

(蓮沼・千田)